

万葉の川心まんようかわごころ

横浜市教育委員会
東部学校教育事務所
澤井園子

雑歌

(巻第十三 三三四七番歌)

沼名川の底なる玉 求めて 得し玉かも
拾ひて 得し玉かも 惜しき 君が 老ゆらく惜しも

人との出会いは、いつも人生を大きく変えていく。それは予期せぬ場合が多い。川の流れもそうだ。決して真っ直ぐではない。ほんのわずかでも低い方を探して流れ、蛇行していく。川の外側を大きく削り、内側に運んできたものを置いていく。分かっているが、まさか五十路を越えて、新入社員になろうとは思わなかった。緊張感の中、日々覚えることは山のように。がしかし、記憶力がついていけなくてほとほと哀しくなる。学生時代を思うと、読む、書く、イメージする、語呂合わせを考える、替え歌を作る、ジェスチャーしながら唱えるなど、ありとあらゆる記憶の工夫をしながらここまでやってきた。ささつと覚える友達が本当に羨ましかった。勤続二十年を越え、ようやく仕事の流れがしっくりと身についたところでの異動は厳しかった。万葉でも「新しき君」は「惜しき君」：「何やら暗号のようだが、今回は「老い」をテーマに万葉の旅に出ることにした。

「沼名川の底にある玉、探し求めて手に入れた玉よ。拾って大切に持っている玉よ。その如くに大切なあなたが老いていくのは、本当に惜しいことだ。」古語では「あたらし」とはもともとは「立派だ・すばらしい」「せっかくの立派なものをもつたいない」「新しい」の意味があった。「アラタシ」との混同から「新しい」の意味が主として残っていった。老いるのがもつたいないということは、そのくらい今がすばらしいということであり、老いを恐れる歌ではなく、これは今をほめる歌なのだ。また、沼名川は富山県と新潟県



みどり橋

境の犬ヶ岳の東麓に発する小滝川かと言われている。これは新潟県糸魚川市を流れる姫川の支流であり、姫川の溪谷からは翡翠の岩石が産出する。淡い緑の石は磨かれて装飾品となり、生命を守り不老長寿をもたらす宝としての贈り物にもなったであろう。その有名な玉のような大切に素晴らしい君なのだ。探し求め、川底の多くの石からようやくと見つけ出した宝のような君なのだ。万葉の昔から、月が一度見えなくなっても必ず再生して満ちていくように、蛇が脱皮をして次々と新しく生まれ変わるかのように、不老不死を願いつつ今を生きているのである。

写真は、新潟県糸魚川市を流れる姫川である。JR頸城大野駅にほど近いこの橋の袂に歌の碑がある。川のせせらぎが何とも美しく響き、心地よい風が吹き、青空にはトンボが舞っていた。いよいよ秋到来。自分を玉だとはなかなか思えないが、「何かの原石」または、「何か埋まっているかもしれない石」として川の流れの中で転がってみよう。誰かに何かにぶつかって磨かれながら、自分の居場所を見つけたら、ごろごろと愚直に進んでいこう。誰もが一人ではない。救いの手もたくさんある。改めて家族の支えも強く強く感じている。

脳のことを調べてみると、フル回転しているようで、実際は使われていない部分も多い。歳を取って知識がなくなったり、深く考えたりできるようななったりするとも言われる。八十歳を越えて登山に成功する方もいた。九十歳を越えて詩を書き始める方もいた。人は諦めなければ、鍛えることで無限の可能性が広がる。「いついつまで生きたい」と自分で限界を決めたりせずに、やりたいことに前向きになるのも悪くない。大河の前に、五十歳などまだまだだひよつ子なのだ。納得し、背筋を伸ばして土手をひとり歩き始めた。